

\*\*\*\*\*

名前 「 」

日暮るるほど、例の集まりぬ。あるは笛を吹き、あるは歌をう

たひ、あるは唱歌をし、あるはうそぶき、扇鳴らしなどするに、

翁、出でていはく、「かたじけなく、きたなげなる所に、年月

を経てものし給ふこと、極まりたるかしこまり」と申す。「『翁

の命、今日明日とも知らぬを、かくのたまふ君達にも、よく思ひ

定めて仕うまつれ』と申すもことわりなり。

『いづれも、劣り優りおはしまさねば、御心ざしのほどは見ゆ

べし。仕うまつらむことは、それになお定むべき』と言へば、こ

れ、よきことなり。人の御恨みもあるまじ』と言ふ。五人の人々

も、「よきことなり」と言へば、翁、入りて言ふ。

かぐや姫、「石作の皇子には、仏の石の鉢といふ物あり。そ

れを取りて賜べ」と言ふ。

「庫持の皇子には、東の海に蓬莱といふ山あるなり。それに

白銀を根とし、黄金を茎とし、白珠を実として立てる木あり。そ

れ一枝、折りて賜はらむ」と言ふ。

「いま一人には、唐土にある火鼠の皮衣を賜へ。大伴の大納言

には、龍の頸に五色に光る珠あり。それを取りて賜へ。石上の

\*\*\*\*\*

## 名前 「 」

中納言ちゆうなごんには、燕つばくらめの持もたる子安こやすの貝かい、一ひとつ取りて賜たまエへ」と言いふ。

翁おきな、「難かたきことにこそあんなれ。この国くににある物ものにもあらず。か

く難かたきことをば、いかに申もうさむ」と言いふ。かぐや姫ひめ、「なにか難かた

からむ」と言いへば、翁おきな、「とまれ、かくまれ、申もうさむ」とて、出い

でて、「かくなむ。聞きこゆるやうに見みせ給たまエへ」と言いへば、皇子みこた

ち・上達部かんだちめ、聞ききて、「おいらかに、『あたりよりだに、な歩ありき

そ』とやはのたまはぬ」と言いひて、倦うんじて、みな帰かえりぬ。